

1 このはじめり

二人の手紙は、大西洋上空どこかで交差したことになる。一九八五年六月、私はイングラッドの友人に手紙を書き、ジョー・スペインという名の女性の女性を探したいので助力を頼んだ。スペインという人が、イングラッドで「自分史」的な手法で写真を使う「フォトセラピー」を行なっているのと同じくらいだ。その同じ週、スペインからの手紙が私の手元に届いた。私が友人に手紙を書いたのとはほぼ同じ日に書かれたものだった。スペインの手紙は次のように始まっていた。

「心理学の学術誌に最近掲載された広告で拝見し、あなたがフォトセラピーの訓練をするワークショップを主宰なさっているのを知りました。私も参加できればと思いますので、活動の詳細を教えてくださいただければ幸いです。私自身がしている仕事に関する最近の記事を同封いたしますので、ご覧下さい。敬具 ジョー・スペイン」

私はすぐに返事をした。よく似た精神の主から手紙をもらったことに興奮を覚えて、翌週にはイングラッドに電話をし、一時間以上も話したのだ。こうして、私たちの長時間にわたる意義深い討論と熱い友情が始まった。

私への最初の手紙を書いたころ、すでにスペインは彼女独自の方法によるフォトセラピーを開

発して久しかった。私は私で、自分なりのフォトセラピー技法を開発して一〇年になっていた。しかし残念なことに、私たちは出会うことなく、お互いを知らずにいた。

スペインの本書は一九八六年に刊行されている。私がヴァンクヴァー（カナダ）に「フォトセラピー・センター」を開設したのは一九八二年である。この二つの出来事を隔てる四年間のあいだに私はイングラッドを訪れており、スペインはカナダでの写真展に作品を出しているが、私たちの仕事の近さを言う人はいなかった。

私がフォトセラピー技法を始めたのは一九七一年のことで、それについて私が初めて書いたものが発表されたのは一九七五年であった。一九八五年までの年月に、この技法の実際の運用（女性、若者、障害者、異文化の人を対象とするカウンセリング方法、この技法の踏まえべき倫理、また技法の訓練など）について私が書いた一章を含む書物は三冊あり、発表した論文もかなりの数にのぼる。同時期にスペインはフォトセラピーの土台となる探究しており、多くのエッセイや記事を発表していた。しかしまた電子メールやインターネット検索エンジンが到来する以前の「暗黒時代」であり、私たちはお互いのとくくみも書いたものも知らずに活動していた。

当時私が知らなかったことはほかにもあった。北アメリカで写真を使ったセラピーを行なっている人、それについて書いている人はすでにいたが、私は知らないでいた。一九七九年、アメリカ合衆国で第一回「国際フォトセラピー・シンポジウム」の発表者という招聘状を受けたときは驚いたものだ。シンポジウムには、この分野のパイオニアたちの多くが出席した（イングラッドからは出席者がなかった）。私たち出席者が協力して雑誌「フォトセラピー・ジャーナル」を創刊し（雑誌は一〇年間続いた）、国際フォトセラピー協会を設立した。

そのメンバーのほとんどは精神医療の専門家で写真好きという人々で、ある日突然思ったって精神科としてのセラピーに写真を含ませてみたというところである。だれもジョー・スペイン

の名前を言う人はなかった。スペンスのほうも、私たちに聞いて聞いたことはなかったものと思

う。一九八三年、私たち初期「バイオニア」のほとんどが執筆したフォトセラピーについての本「精神医療におけるフォトセラピー」が刊行された。セラピーに写真を使うそれぞれに独特の方法を論じた初の書物であった。編集者がスペンスを知っていたら、もちろん寄稿を依頼したであらう。

この本は、理論的基盤を示し、それぞれの実践に関する図版も多い点ではすぐれていたが、読者が自分でフォトセラピーを始めるための枠組みを教えてくれるような本ではなかった。そこで私は、フォトセラピーに関する本を自分で書くことにした。私が自分のセクスターで行なっているトリーニング・ワークショップの内容を書いておけば、セラピストがこのやり方を学んで自分の仕事に取りいれることができるばかりでなく、ふつうの人々がそれぞれに写真を使って自己の探究や回復をはかるのに役立つだろうと思つた。

そこで私は、医療としてでなく自分で写真を使ってセラピーをしている人の取材を始めた。それがきっかけになってスペンスの存在を知り、彼女を探したそうと躍起になっていたのである。幸いにもスペンスと連絡がつき、一九九三年刊行の私の本でその仕事に言及することができた。

こうして歴史的流れをあれこれふりかえるとわかるように、真に客観的な意味でいえば、私もスペンスもフォトセラピーの「発明者」ではない。それよりも重要なのは、私もスペンスも自分が発明したと思つていたことだ。つまり、私たちはそれぞれに孤独な追求を進めていた。人々が自分のもつている写真を完結した過去のものと見るのではなく、そこからなにかを深めていく出発点と見ることによって開かれる、不思議な効力をもつ過程。その過程に対する共通の関心が大波のように昂揚して構築されつつあり、私たちはそうとは知らずにその一部をなしていたのだ。

2 フォトセラピー——二人の方法

私のフォトセラピーは、スペンスが書いたり実践したりしていたフォトセラピーとははつきりと違っている。イギリスの外では、スペンスの仕事はおそらく「自伝的追究的な写真」ないしは「自己回復のための写真」とでも呼ぶべきものだろう。しかし私たちが二人の仕事の理論的基盤と前提は共通しており、それは写真によって自分（そして自分の人生）と直面して自然な回復をする過程を実現しようということだった。

二人の実践はかなり似かよっていたが、同時に大きく違っていた。深い交流をするために写真を使う点では同じで、写真は「記憶の鏡」であり、言語ではうまく表わせない感覚への橋を架けてくれるものである。写真にもとづいてクライアントと対話するというのが、セラピストとして私が使う方法であり、クライアントを助けることを目的とする。スペンスがしていたのは、ほかの人と協力しながら、自分自身を対象としていた。

私たち二人の違いを簡単に言えば、次のようになるだろう。スペンスは写真家であり、彼女自身の回復のために長年にわたり写真を使ってきたが、医療的な意味で言うセラピーの流れとは無縁であった。私は心理学者、芸術セラピストであり、長年にわたりクライアントとのカウンセリングで写真を補助的道具とする技法を使っている。スペンスは彼女自身の人生と、自分のポートレート写真、家族写真のイメージを考察し、写真による人生の再構築を追究した。私のフォトセラピーでは、私自身が写る写真は関係がない。私の仕事扱うのは私の人生ではなく、クライアントの人生だからだ。

スペンスはカメラを武器のように、探測機のように、鏡のように使って自分を探究して、自身の活力とし、秘密を共有し、生を語り、真実を叫び、理解への指針とした。そうした手法をほかの人々と分かちあい、ときには相互的な共同作業を行なった。私も強力な道具としてカメラ（および人々のスナップ写真と家族写真）を使って久しいが、私がそうするのは、ほかの人が個として力を取りもどして十全に人生を生きていくのを助けるためである。

私の仕事はクライアントに「安全な場所」を提供することだ。そこでクライアントは私の指導と積極的な介入を受けながら、クライアント自身の探究を進める。指導と介入には写真を使い、クライアントがそれに集中して、感覚を呼び起こし、記憶をめざめさせて、長年心のなかに抑えていた、しまっていたりした事柄をはっきり意識できるようにする。そうしてのち、クライアントが見たり撮ったりした写真イメージについて深く徹底した話をして、写真を前にしたときに揺さぶられた感情が何であったのかを考えてみる。そして認識、意識、言語のレベルでそれについてクライアントと話しあい、セラピーとしての目的を遂げるために必要な今後の対話の方針と使用する写真の方針を出す。

以下に私自身の仕事を簡単に述べる。私たちの仕事は互いに対立するものではなく、写真による回復のための実践というひと連なりのもの両端というだけのことだという私の見解はつきりさせるためである。

私がセラピストとしてする仕事では、クライアントの私的なスナップ写真、家族写真（そしてそれらの写真に対するクライアントの関係）が、セラピー・コミュニケーションのための有効な触媒となる。無意識の過程は人生に大きな影響力をもつとはいえ、言語では語りがたく、外からは検証しがたいものだ。言語によらずにその過程へと架橋するために、クライアントのスナップ写真と家族アルバムを使う。自分の写真から、なんらかの感情、思考、記憶がクライアントのな

かに湧きおこってくると、クライアントは自分の抱えている問題についての理解を深め、その問題を自分で表現し、さらには解決できるようになることが多い。そして自分のなかに抑えてきた感情や問題の背後にある真の理由をさらにはつきりさせることに向かう。

クライアントの私的なスナップ写真は、いわば彼らの「人生の足跡」であり、彼らの感情と身体が残したしるしである。本人は意識していなくても、これからの人生の方向を指し示しているときもある。個人的な写真は、芸術作品ではないが、独特の言語を語ってくれるので、自己形成の強力なシンボル、情緒的触媒、さまざまな物事が移りゆくことのメタファー、家族の変遷の視覚的記録、個人と家族の物語として、セラピーに使うことができる。この意味で、クライアントの写真を使うと、言葉中心の伝統的なセラピーだけによるよりもはるかに深い内省を引き出すことができる。

私がするセラピーでは、クライアントは彼らの写真を私に見せるだけではない。もってきた写真を見て、それと対話するだけでなく、新たに自分を被写体にして写真を撮り、新しい自分の積極的な再構築、視覚的な再形成、再創造も行なう。もちろんその過程で、現実化しえない自分を想像したり、そういう夢のなかの自分と出会ったりすることもある。古い家族写真をつくりなおして、それと対話することもあるし、さらにビデオを組みあわせたり、芸術セラピーの過程をあわせて行なうこともある。

クライアントは写真と対話し、写真を探測して自分の秘密の深部へと分け入り、写真のメッセージを発見し、そこにあるものは何かを探り、それを通して自分を語る。さらに自分の物語からアニメーション、芸術表現、日記などをつくりだすための主たる材料としてそれら写真を使うこともある。クライアントは、じかに自分自身と向きあう力に欠けるときに、自分を表現するためになんども写真を使う。

フォトセラピーの実践に関して、スペインと私で意見が一致していた点は多くある。なかでも重要だと思うのは、どちらの仕事も「感情面での象徴的コミュニケーションとしての写真」に関するものであって、「芸術としての写真」ではないことだ。壁に飾って受動的に鑑賞するのではなく、変化と自己探求の能動的な動力因として写真を使うということである。したがって、このセラピー技法を実行するうえで、撮影の経験も写真芸術についての知識も必要なく、むしろそうした訓練を受けていると感情の自然な表出の邪魔になるというのが、スペインと私の意見だった。

北アメリカでは、セラピーをする者は正式機関で訓練を受けて、専門職として免許を取得しなければならぬ。イギリスでは、近年まで、アカデミックな訓練を受けていなくても自分の仕事をセラピーだと言っことはまったく自由であった。スペインが自身を「フォトセラピスト」と名乗って私に初めて手紙をくれたとき、私が彼女を北アメリカで言うところの「フォトセラピスト」だと思ひこんだのはそういう事情である。細かいことのようにだが、これは私たち二人の実践を互いに理解するうえで重要な意味をもった。

二人のあいだにあるこうした違いを明らかにすることから始まった対話は、さまざまな概念をめぐって、以後数年間にわたって行なわれる詳細な議論へとつながっていく。そこではそれぞれの仕事の領域で得たこと、また生活のなかで知ったことなど、あれこれの話が私たちのあいだで交わされた。

3 このおわり、ではない

一九九一年、スペインはヴァンクラーグアの家が家に数日間滞在した。二人でエミリー・カミエル学校でのシンポのパネルに参加し、仕事について何時間も話しあった。私が主宰するフォトセ

ラピー・センターでフォトセラピーのセッションまで行なった。そして私たちの仕事とその将来についての深く哲学的な思索と探究をして長い時間を過ごした。

私たちが行き着いた「論理的な」結論は、それまで二人を隔っていた距離をどうにか克服して、両者の活動をつなぐ必要があるということだった。自分のなかをよく精査して、抱えている問題になんらかの答えを出そうとしている人々は、まずスペインに会いに行き、なにかセラピー・セッションをしてから、次に自分の写真をもって私のところに来る。理想を言えば、スペインと一緒に来る。そして、スペインとのセッションで使った写真で私とセラピー・セッションを行なう。別の写真をもってきてもらったり、私の提案にもとづいて新たに撮影してもらって、それを使うこともする。

スペインと私はこれを「1&1フォトセラピー」と命名しようと言って、笑った。これなら二人のうちどちらが上位という意味が生じない。もちろんこれは実現不可能な夢でしかなく、その翌年スペインはこの世を去った。死を予感したスペインは、数十枚のスライドと写真、そしていくつもの論文を私に送ってくれた。フォトセラピー・センターのファイルに保管して私がセラピーに使い、彼女の仕事が生かされるようにという配慮だった。

あれ以来いままに至るまで、いろいろな意味で、スペインとの対話は続いている。講義したり、原稿を執筆したりするとき、私はいつもスペインの仕事に言及しており、彼女が残してくれた火に薪をくべつけ、その火がいつまでも世界を照らしてくれらるようにと願っている。私たちの仕事には違いがあったが、核心の目的は治療と回復にあり、同じ基盤に立っていた。人は、内なる自己がよりよい姿で見えてくれれば、それまで封印していた扉を開けて、自分の苦しみと直面し、治療と回復に通じる道を見いだすことができる。

デジタル・カメラ、動画カメラなどでウェブ会議をする技術が登場し、1&1のパートナーシ

アップを実現することが可能になった。いまこそ、スベンスがいてくれればと強く思う。彼女の写真は、いまも私の心近くに置いて大切にしている。

[注]

- * 1 Judy Weiser, 'PhotoTherapy: Photography as a Verb,' *The B.C. Photographer*, 1975, 2, pp.33-36.
 - * 2 David A. Krauss and Jerry L. Fryrear (eds), *Phototherapy in Mental Health*, Springfield, Illinois: Charles C. Thomas, 1983.
 - * 3 Judy Weiser, *PhotoTherapy Techniques: Exploring the Secrets of Personal Snapshots and Family Albums*, 1993.
- ジエティ・ライサーが執筆した論文の記事は、すべて以下のウェブページPhotoTherapy TechniquesからPDFファイルで無料ダウンロードできる。 <http://www.phototherapy-centre.com>

女・アート・イデオロギー

フェミニズムが読みなおす芸術表現の歴史

R・バーカー・十G・ボロツク [著]

萩原弘子 [訳]

定価：本体4300円(税別)

女性のアーティストがアートの歴史からごっそりと抹殺されたのは20世紀特有の出来事である。そこで私たちが考えようとしているのは大変重要で根本的な問題、つまり「なぜそうなったか」である。

視線と差異

フェミニズムで読む美術史

グリセルタ・ボロツク [著]

萩原弘子 [訳]

定価：本体4300円(税別)

美術史に女を付け加えることと、フェミニスト美術史学をつくりだすことは同じことだろうか。西洋近代美術の歴史におけるジェンダーバイアスを明らかにし、現代の文化生産のすべての場で、なぜフェミニズムが重要なのかという問いに答える。

私、階級、家族

— ジョー・スベンス自伝的写真

発行日 2004年12月10日 第1刷発行

著者 ジョー・スベンス

訳者 萩原弘子

発行者 村上克江

発行所 株式会社 新水社

〒102-0072 東京都千代田区神田神保町2-2

tel. 03-3261-8794 fax. 03-3261-8903

<http://www.shinsui.co.jp>

印刷所 モリモト印刷株式会社

製本所 ナシヨナル製本協同組合

© Hiroko Hagiwara, 2004 Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で定められた場合を除き、著作権および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め社外にて許諾を求めてください。
落丁本・乱丁本はお取り替えます。

ISBN 4-88385-069-2

■ 著者紹介

ジョー・スペンス (Jo Spence)

1934～1992年。写真家。本書以外の主な編著作は次のとおり。

Jo Spence and Patricia Holland (eds), *Family Snaps—The Meanings of Domestic Photography* (1991); Jo Spence and Joan Solomon (eds), *What Can a Woman Do with a Camera?—A Handbook of Photography for Women* (1995); Jo Spence and Jo Stanley (eds), *Cultural Sniping—The Art of Transgression* (1995).

テリー・デネット (Terry Dennett)

写真家。長年「9時から5時まで」の仕事としてロンドン動物園に勤務し、動物学研究の資料となる科学写真を撮影した。1974年からは「5時から9時まで」の仕事として、ジョー・スペンスとともに設立した非営利の「写真ワークショップ」社で写真の教育活動にも携わった。現在はロンドンで「ジョー・スペンス記念資料室」を主宰。

ジュディ・ワイザー (Judy Weiser)

セラピスト (RPsych, A.T.R.)。カナダのヴァンクーヴァーで「フォトセラピー・センター」を主宰。著書に次のものがある。

PhotoTherapy Techniques: Exploring the Secrets of Personal Snapshots and Family Albums (1993).

ジョー・スペンス自伝的写真

私、階級、家族



萩原弘子 訳



ジョー・スペンス 著



私、階級、家族

ジョー・スペンス

自伝的写真

ジョー・スペンス 著

萩原弘子 訳

新水社

写真家ジョー・スペインスが写真とテク ストでつづる自己探究と創作の歩み。

階級、家族の拘束と格闘し、乳がん患者として医療の権威に
立ち向かい、フォトセラピーによる心身の解放を追求して、
1992年に亡くなったスペインスが、ここに甦る。

写真家ジョー・スペインス 著

萩原弘子 訳

新水社

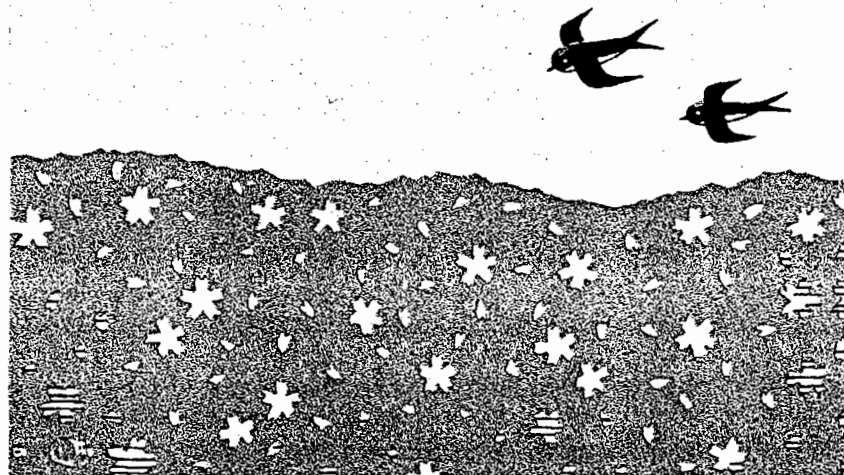
「私が是非とも伝えたいのは、ひとりの写真家がどんなふうに変化してき
たかである。通常の写真的アプローチ、……写真家が独力で創作活動を
していると前提して創造性に関するさまざまな神話を永続させるやり方に
は異議を唱えたい。むしろわれわれは文化と経済が織りなす諸関係のネッ
トワークのただ中に位置づけられているという事実を、はっきりと認識す
る立場をとりたい。」——ジョー・スペインス

DEAR JUDY WEISER,

THANK YOU FOR YOUR CONTRIBUTION.

2005, JANUARY 18

HAGIWARA HIROKO





ジョー・スペンス 著

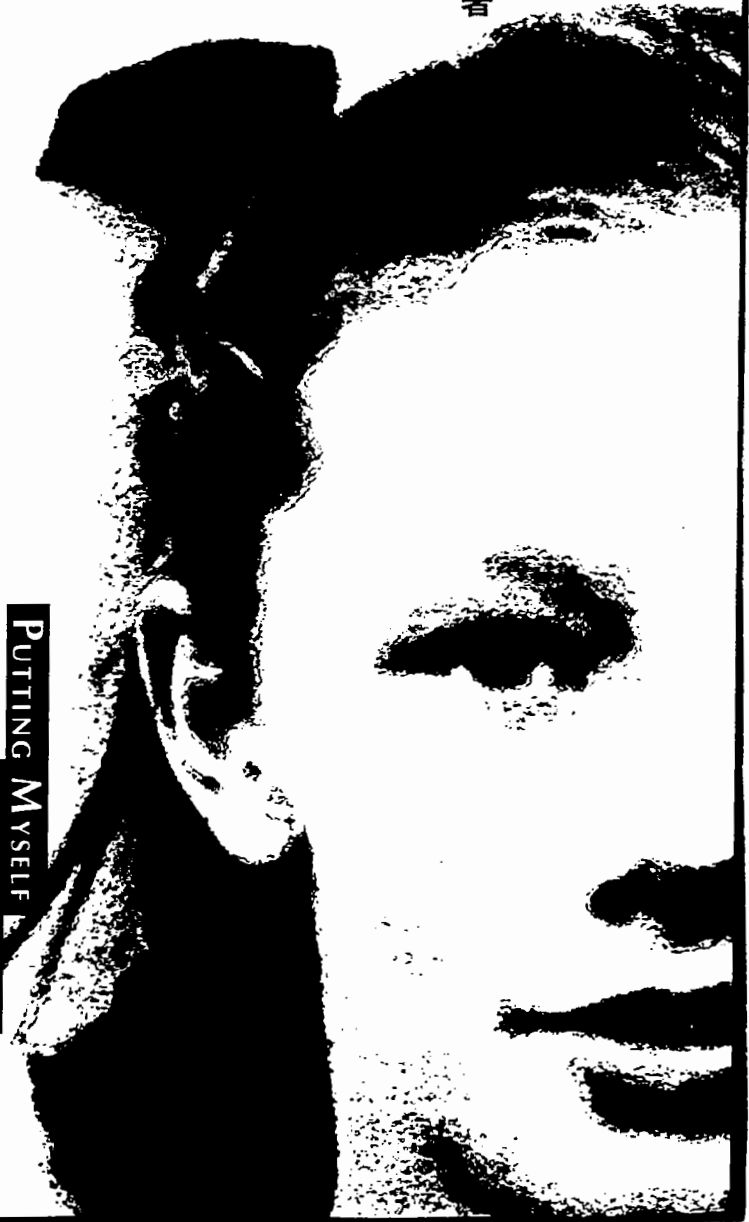


萩原弘子 訳



私、階級、家族

ジョー・スペンス自伝的写真



PUTTING MYSELF
IN THE PICTURE

